

## 第2章 脅威を評価する

全ての脅威は同じ原因で発生するのではない。しかし、脅威はタイムリーに処理されるべきであり、どのように処理するかを迅速に行う必要がある。

現在の環境下で、一部の学校は全ての暴力を画一的な手順で処理しようとする傾向がある。脅威が実行される可能性が高かろうが低かろうが、どの脅威に対してでもその対応は同じとなる。最近の校内発砲事件の衝撃波によって、この反応は理解できないわけではないが、それは過剰反応でもある。それどころかこの対応では、深刻な脅威の可能性を過少に評価し、可能性の程度の低い脅威に過剰反応する結果になりかねず、結果として危険性のない生徒を不当に処罰し汚名を着せる事になりかねない。

全ての脅威を同じ手順でお処理する学校は、エーブラム・モスローが唱えた次のような誤謬に陥りやすい。

”手元にある道具が金槌しかなければ、全ての問題は釘に見えるものだ。”  
もちろん、全ての問題は同じ形の”釘”ではなく、全ての脅威が同じように危険となって現れるのではなく、同じレベルの対応を必要とするのではない。

ある脅威はコロンバイン高校で発生したと同スケールの危機の脅しを明確に伝える。一方では誰の安全にもほとんど影響を及ぼさない程度の脅威もある。どちらも無視してはいけませんが、この両方の脅威に対して同じ対応をとることは効率的でなく自己敗北的ですらある。全ての学校に、適切な訓練を受けたスタッフの手で管理される脅威評価システムがあれば、学校管理者や学校職員が脅威のレベルを区分し、異なるレベルの対応策を選択するのに大いに役立つ。

脅威評価 (threat assessment) とは二つの問題に対して情報に基づく判断を行おうとするものである。その問題は第1に「その脅威そのものはどの程度実現性があり深刻であるか」、第2に「脅威者はその脅威を実行するためにどの程度の資源 (金銭、道具、武器など)、意図や動機を持っているのか」ということである。

脅威評価を実行するための体系的手順とは、この論文の冒頭に紹介したレノ法務長官が学校長や教師に対する書簡にのなかで「全米の学校は総合的暴力予防計画をそれぞれの学内で整備するために全体的な活動を求める」と述べられた全国的な活動の一部に含まれるべきものである。

この書簡は法務省と教育省が共同で発行した「初期の注意信号、迅速な対応：学校安全への手引き」という本を紹介しているが、同時にこの書簡には次のような注意深い助言が書き添えられている。

「生徒に行き過ぎたラベルを貼ったり、この手引きを使って雑な評価方法で生徒に烙印を押すなどの過剰対応に陥ることは極めて有害である。」

この論文で紹介する全米暴力分析センターの「脅威評価——指導・介入モデル」は教育者、法執行官、精神衛生専門家、その他学校安全関係者が利用できる内容となっている。このモデルは脅威とその脅威を起こした人物を評価して、その暴力的行為の実現性を情報に基づいて判断するための方法的手順の概要を示すものである。このモデルを効果的に使用するために、評価実行者は適切な訓練を受講しなければならない。

## 脅威とは何か

脅威とは誰かに対して損害を与え又は暴力を及ぼそうとする意図の表明である。脅威は口頭、文書又は抽象的な行為—たとえば手であたかも誰かに発砲するような動作—の何れかで表明される。

脅威評価は二つの重要な原則に基づく。第1は全ての脅威や脅威者は同じではないこと、第2はほとんどの脅威者はその脅威を実行することはないこと、である。しかし全ての脅威は深刻に受け止め評価する必要がある。

全米暴力分析センターの経験によると、大部分の脅威は無名又は偽名で行われるという。しかし、脅威の評価は脅威者の背景、個性、生活スタイル及び資源を評価することに大きく依存しているので、脅威者を識別することは情報に基づく脅威の評価を行う上で非常に重要である。また脅威が深刻で告訴せねばならないようであれば、刑事訴訟を起こすためにも脅威者を識別することが必要である。もし脅威者の身元が明らかにならない場合は、その対応は脅威の評価のみに依存せざるを得ない。脅威の評価も脅威者が特定されれば変わるかもしれない。もし追加情報によって脅威者が危険人物となった場合、リスクが低いと見られていた脅威を高リスク脅威に評価替えせねばならないかもしれない。それとは逆に、高リスクと区分されている脅威も、もし脅威者の身元が明らかになりその人物に脅威を実行するだけの意図、能力、手段、あるいは動機が見あたらないときは、その脅威の危険度は引き下げられることになるだろう。

## 動機

脅威は様々な理由によって行われる。脅威は注意信号であるかもしれないし、罰則やその他不安への恐れとしての反動かもしれない。あるいは注目を引きつけるためかもしれない。それは嘲笑、脅かし、力や支配の確認、処罰、強制、威し、恐れ、仕返し、軽蔑、生命への危害、権威への挑戦、あるいは自分の保護などが理由かもしれない。脅威の底流にある感情は愛、嫌悪、恐れ、怒り、あるいは注意を引きつける、復讐、興奮、あるいは認識慾であるかもしれない。

脅威の動機を完全な確実さで認識することは無理かもしれないが、可能な限り動機を理解することが脅威評価の重要な要素となる。脅威は、脅威が行われた段階での脅威者の知性及び感情を反映している。しかし人間の精神状態は、アルコール、薬物、あるいは恋愛の破局、落第、両親との喧嘩など感情の激しい起伏によって一時的に大きく影響される。感情のつまずきが吸収され落ち着いてくると、あるいはアルコールや薬物の影響が消滅すると、暴力的脅威を実行しようとする動機は消滅するかもしれない。

## 道しるべ

一般的にあって、人間は一瞬の間に非暴力的から暴力的に切り替わることはない。暴力的でない人は問題解決のためにとっさに暴力の使用を決めることはない。しかし、暴力への道は進化的で、その道筋には”道しるべ”が立っている。

脅威は観察可能な行為であるが、その他の道しるべとしては会話、文書、絵画等で表現される欲求不満や失望による落ち込み、破壊又は復讐への空想が指摘できる。

## 脅威の形態

脅威は、直接、間接、ベールをかぶせる、あるいは条件付きの4種に区分できる。

直接的脅威：具体的な目標に対して具体的な行為を指定し、率直・明確でかつ明白に伝えられる。例えば、「俺は学校の体育館に爆弾を仕掛けるつもりだ。」

間接的脅威：ぼやっと明確でない、しかも曖昧な表現。計画、目標犠牲者、動機その他の脅威の諸要素が曖昧である。例えば「そのつもりになったら、俺はこの学校の全員を殺すことができるかもしれないぞ。」暴力が暗示されているが、暴力の表現は「そのつもりになったら」とためらいがちである。暴力は「起きるかもしれない」と暗示しているが「起きるぞ」とはしていない。

ベールをかぶった脅威：強く感じられるが明確に表明されていない脅威。例えば、「お前が周りでうろろうろしなかつたら、俺は気分が良いぞ。」この表現は明らかに暴力行為の可能性を示唆しているが、そのメッセージの解釈を犠牲者になるかもしれない人物に任せ、しかも脅威の決定的な意味を伝えている。

条件的脅威：この種の脅威は金品を強要する場合にしばしば見受けられる。ここではある要求や条件が満足されないときは暴行が行われると警告する。例えば「もし百万ドルを支払わないのなら、学校に爆弾を仕掛けるぞ。」

## 脅威評価に当たっての諸要素

具体的かつ尤もらしい詳細：この要素は脅威を評価するに当たって最も重要な要素である。その細部項目の中には、犠牲者の身元、脅威の原因、手段、武器、並びに実行の方法、実行日時、脅威行為が実行される場所、並びに既に実行されている計画又は準備に関する具体的な情報などが含まれる。

詳細が具体的であれば検討、計画、準備が十分に行われている事、及び脅威者は脅威をやり通すだろうという高リスクが示唆される。他方で、脅威内容の詳細が欠けている場合は、脅威者は偶発段階を含めた全過程を十分に検討していない、脅威を進める段取りをまだ開始していない、あるいは暴力の実行を深刻には考えていないが何らかの欲求不満に対する感情のガス抜きをしたい、特定の犠牲者を威し驚かせたい、あるいは学校の特定行事や日常行事を邪魔したいなどの場合が考えられる。

具体的だが論理的ではないか尤もらしさに欠ける脅威は、その脅威の深刻度が少ないことを示唆しているのかもしれない。例えばある高校生が「翌日の昼食時間に学校の講堂を数百ポンドのプルトニウムで爆破するつもりだ。」との脅威状を送りつけた。この脅威状には詳細が記され、時間、場所、及び武器が具体的に述べられている。しかしこの詳細には説得性がない。プルトニウムは正規市場でも闇市場でも入手できる可能性がない。高価で運搬が難しい。操作は危険で、核反応を引き起こすには複雑な起爆装置が必要である。高校生がプルトニウムを入手しうる可能性はもともとないが、それを数百ポンドも入手することは不可能である。その生徒はプルトニウムを起爆するための知識も複雑な装置も持っていないだろう。このような非現実的な脅威が実行されることは明らかにあり得ない。

脅威の感情的な表現：この感情的な表現は脅威者の精神状態を知る重要な手がかりとなる感情はメロドラマ的な用語や記号の異常な使い方で伝えられる。たとえば「お前は嫌いだ!!!!!!」、「お前は俺の人生を台無しにした!!!!!!」、「神のお恵みを!!!!!!」などのように興奮したあるいは支離滅裂な文章や、神や宗教的存在または最後通牒的文章がこれに当たる。

感情的な脅威は評価者に脅威者の気質に関する情報を提供するが、それは脅威の危険度の尺度になるわけではない。感情的な脅威は恐ろしく感じられるが、脅威に示される感情の激しさとその脅威がもたらす危険度との間には何の相関関係も発見されていない。

事件促進圧力 (Precipitating Stressor)：事件、環境、反動、状況などは脅威事件の発生を促進する圧力となりうる。促進圧力は一見したところ無意味で脅威と直接の関係がないように見えるが、それにもかかわらずそれは触媒になることがある。例えば、生徒が登校前に母親と口論した。口論の理由は学校と何の関係もない些細なことであ

っただろう。しかしそれが感情的な連鎖反応を引き起こし、その日、学校で他の生徒を脅威する結果に繋がってしまった。(それはおそらく彼が過去において考えていたことかもしれないが。)

促進圧力の衝撃は、明らかに”性向要因 (Predisposing Factors)” に深く関係している。性向要因とは個人の底流にある性向、性格、気質などで、青少年を暴力や暴力的行為の幻想に傾かせる気質である。従って暴力の”引き金”に関する情報分析では、失敗や意気消沈に対する生徒の弱さなど、底流に流れるこれら性向要因を広範に取り上げて検討する必要がある。

## リスクのレベル

低レベルの脅威：犠牲者や公衆の安全に最小の危機しか持ち込まない脅威。

- ・脅威は曖昧で間接的。
- ・脅威に含まれる情報は首尾一貫せず、詳細に欠けるか尤もらしくない。
- ・脅威は現実性に欠ける。
- ・脅威の内容から、脅威者が脅威を実行するように思われない。

中レベルの脅威：実行されるかもしれない脅威、但し必ず実行されるとは思えない。

- ・低レベル脅威よりは直接的で具体的である。
- ・脅威の文体から察して、脅威者はどのように実行するかを多少とも検討している。
- ・場所と時間の可能性について一般的に述べられている。(但し表現内容は詳細計画と呼ぶには遙かに低い。)
- ・脅威者が準備行動に入った事を示す強い示唆はない。但し、準備行動に入った可能性を示すベールをかぶせた言及や、曖昧な又は決定的ではない証拠を示すことがある。――暴力行為の計画を示す書類や映画の存在を暗示したり、武器の入手可能性について一般的にのべることなど。
- ・脅威が空虚でないことを伝えるための特定の表現が含まれることがある。「俺は本気だぜ。」、「俺は本当にやるつもりだぜ。」など。

高レベルの脅威：他人に対する緊迫した深刻な危険をもたらすと思われる脅威。

- ・脅威は直接的、具体的で尤もらしい。
- ・脅威は、脅威を実行するのに必要かつ具体的な処置をとったことを示している。例えば脅威者は武器を入手し練習を済ませたとか、犠牲者を監視下に置いている事を示す表現。

実例：「明朝9時に、俺は校長に発砲するつもりだ。この時間には校長は一人であるからだ。俺は9mm拳銃を持ってるぜ。いいか、俺は自分が何をするつもりかよく分かっているんだ。俺はこの学校で校長のやることに飽き飽きしているんだ。」

この脅威は直接的で、犠牲者、動機、武器、場所、時間を具体的に指定し、しかも脅威者は目標の行動時間を知り脅威の実行準備を進めていることを示唆している。全米暴力分析センターの脅威通信分析の経験によると、一般的に脅威がより直接的でより詳細に述べているほど、その脅威が実施される危険性はより深刻であるとのことだ。高レベルの危機と評価された脅威は、ほとんど常に法執行部門の指導・介入が必要となるだろう。

多くの場合、脅威レベルの区分はそれほど明確にできないだろうし、その境界は重複しているだろう。そのような場合、脅威又は脅威者に関する追加情報を取得できるとそのような混乱を明確化するのに役立つ。重要なことは、学校が最も深刻な脅威を識別できその対策を立てられることだ。その他の脅威に対しては標準的且つタイムリーな手順で適切に対応することだ。